

採集記録

浦幌におけるキタドジョウの記録

円子紳一¹⁾・林巧真²⁾・持田誠³⁾

Shinichi, Maruko, Takuma Hayashi and Makoto Mochida, 2022. First recording of loach “Kita-Dojou” (*Misgurnus* sp. Clade A) in Urahoro, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 22: 29-31.

1. 採集記録

2021年5月23日、北海道十勝郡浦幌町東山の「うらほろ森林公園」から流れる宮の沢川で、いわゆる「キタドジョウ *Misgurnus* sp. (Clade A)」を採集した。採集個体は、「浦幌の自然を楽しむ会」のウチダザリガ

ニ駆除活動の際に、たも網に入ったものである。

捕獲場所は、宮の沢川が旧オベトン川に合流する地点付近（図1）で、川底は足がぬかるほどのヘドロ状で多年生の水生植物「ミクリ」や「エゾミクリ」が生育している。捕獲した円子が「何か違う」と浦幌町立博物館に持ち込んだ。

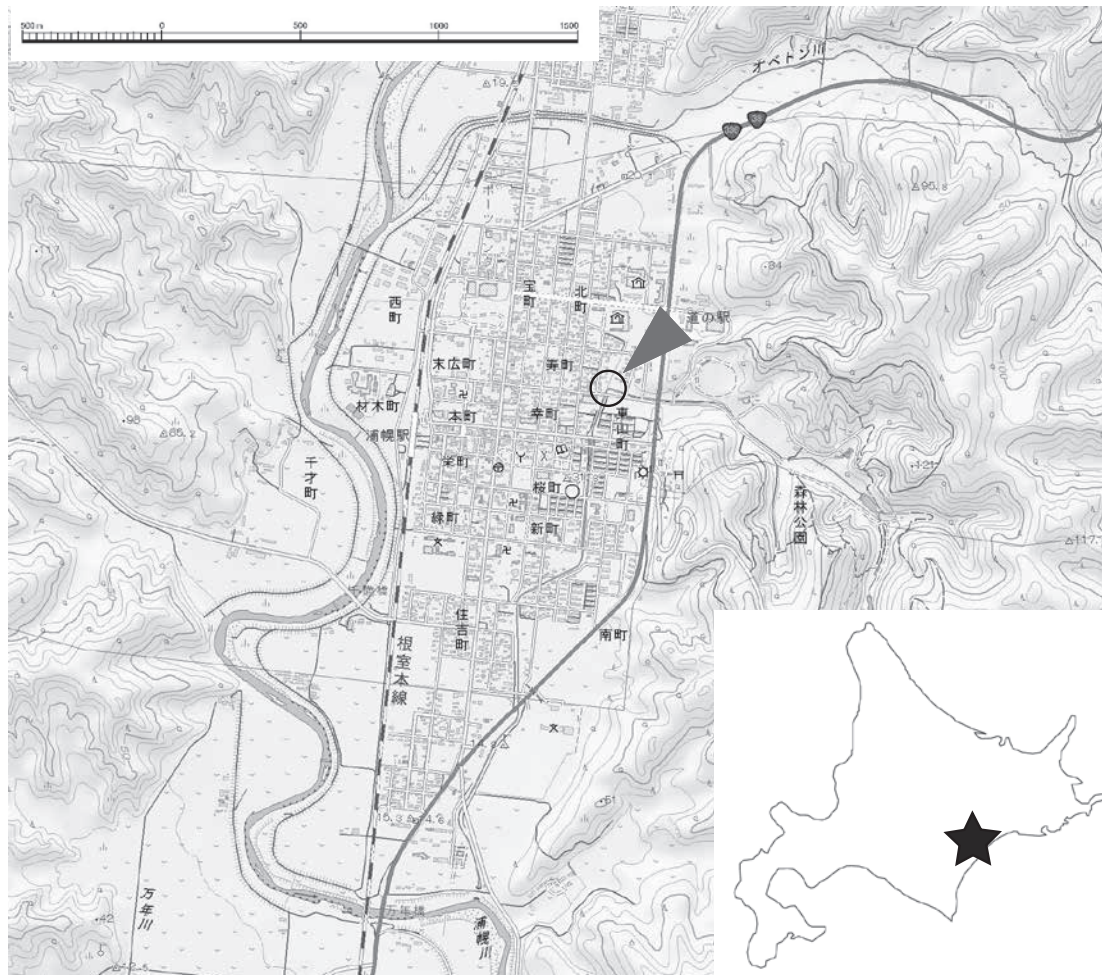


図1 採集地点の宮の沢川と旧オベトン川の合流地点（三角形の先端の円内）と浦幌町の位置（星印）

- 1) 浦幌の自然を楽しむ会
- 2) 元浦幌町立図書館（現、中川郡池田町）
- 3) 浦幌町立博物館



図2 浦幌町で生息が確認されたキタドジョウ（浦幌町立博物館撮影）



図3 浦幌町で生息が確認されたキタドジョウの口髭付近のようす（浦幌町立博物館撮影）

2. 「キタドジョウ」の同定について

中島・内山（2017）は、ドジョウの遺伝的系統および形態的特徴の違いに関するMorishima et al.(2008)、小出水ら（2009）、清水ほか（2011）、Kitagawa et al.（2011）、Okada et al.（2017）の研究を受け、これまで1種とされていた日本産ドジョウ（稗田1990, 上田ほか2005, 中坊2013, 尼岡ほか2020）を4種（ドジョウ、キタドジョウ、ヒョウモンドジョウ、シノビドジョウ）に整理した。キタドジョウは九州大学総合研究博物館の収蔵標本に基づいて和名が提唱されているが、ヒョウモンドジョウ、シノビドジョウとともに、学名が未決定のままである。

いっぽう、中島・内山（2017）、細谷（2019）では、従来みられるドジョウとの外形上の識別点を提示している。そこで、浦幌町立博物館では、採集個体を生体のまま浦幌町立図書館に持ち込み、中島・内山(2017)、細谷（2019）に記述された特徴にもとづいて、まず林が観察・同定をおこない、その後、持田が再同定を実施した。

採集個体（図2）は捕獲時の体長が約180mmで、尾鰭は大きく損傷して欠けている。

中島・内山（2017）に挙げられている形態上の主な特徴としては、①5対（10本）の口髭を持つ（図3）、②頭頂部から吻端にかけてやや直線的、③眼は比較的小さい、④骨質盤はシャモジ状で後端はやや角ばる、⑤体長は80～200mmなどがあげられている。細谷（2019）は、⑥尾びれ付け根上部の暗色斑の有無をあげている。①、②、③の特徴が一致した。いっぽう④については、生きた状態での観察であることから染色等ができず、詳細について未確認である。⑥の暗色斑については不明瞭であった。

3. 浦幌におけるドジョウの記録

浦幌町からは、これまでドジョウ（口髭5対）、フクドジョウ（口髭3対）、エゾホトケドジョウ（口髭4対）の3種の生息が報告されている（松本1978）。今回の採集個体がキタドジョウに該当する形態を持っていたことから、従来ドジョウとされてきた記録についても、再検討の必要がある。

本種は、池沼や水路、河川中・下流域に生息し、植物が豊富で水温の低い、止水から緩やかな流れのある泥底の環境を好むが、生活史の詳細については不明な点が多いとされる。また、現状の分類や分布範囲に課題が多いことから、環境省のレッドリストは2022年現在、キタドジョウ、シノビドジョウ、ヒョウモンドジョウの3種について「DD（情報不足）」に指定している（環境省2020）。このため、地域におけるドジョウ類ファウナの詳細な把握・検討が必要と考えられることから、旗ほか（2020）は、宮城県に生育するドジョウについて、遺伝的側面と形態的側面からの、詳細な検討を実施している。

北海道に生息するドジョウ（狭義）については、以前から自然分布かどうか疑問視されており（稗田1990）、中島・内山（2017）は放流由来の外来集団である可能性を指摘している。このため、北海道においても、宮城県のような地域ファウナの詳細な検討が必要である。今後、町内および隣接地域におけるドジョウ類の実態について、採集による同定と分布の詳細を確認することが必要と考えられる。

なお、浦幌町立博物館には、2015年以降、町内で採集されたドジョウの液浸標本が複数所蔵されていることから、これらの標本の再同定も課題である。

採集個体は同博物館で飼育されていて、北海道大学

農学部動物生態学研究室 4 年の三枝（みえだ）弘典さんが、キタドジョウとドジョウの違いなどを分かりやすく解説したパネルと共に展示されている。

引用文献

- 尼岡邦夫・仲谷一宏・矢部衛. 2020. 北海道の魚類全種図鑑. 北海道新聞社.
- 旗薫・小池花苗・丹野夕輝・中島淳. 2020. 宮城県で確認されたドジョウ（クレードA）（コイ目ドジョウ科）雄個体の遺伝的・形態的特徴. 伊豆沼・内沼研究報告, 14: 15-32.
- 稗田一俊. 1990. 北海道の淡水魚（3版）. 北海道新聞社.
- 細谷和海（編）. 2019. 増補改訂日本の淡水魚. 山と溪谷社.
- 環境省. 2020. レッドリスト2020. 環境省 <https://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf> (2022年2月20日閲覧).
- Kitagawa, T., Fujii, Y. & Koizumi, N. 2011. Origin of the two major distinct mtDNA clades of the Japanese population of the oriental weather loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Teleostei: Cobitidae). *Folia Zool.* 60: 343–349. DOI: 10.25225/fozo.v60.i4.a12.2011
- 小出水規行・竹村武士・渡辺恵司・森淳. 2009. ミトコンドリアDNAによるドジョウの遺伝特性. 農業農村工学会論文集, 77(1): 7–16.
- 松本尚志. 1978. 浦幌町の淡水魚類の分布. 浦幌町郷土博物館報告, 12: 6-10.
- Morishima, Kagayaki., Yuka Nakamura-Shiokawa, Etsuko Bando, Ya-Juan Li, Alicja Boron', Md Mukhlesur Rahman Khan, & Katsutoshi Arai. 2008. Cryptic clonal lineages and genetic diversity in the loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Teleostei: Cobitidae) inferred from unclear and mitochondrial DNA analyses. *Genetica*, 132: 159–171.
- 中坊徹次（編）. 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 中島淳・内山りゅう. 2017. 日本のドジョウ. 山と溪谷社.
- Okada, R, T. Inui, Y. Iguchi, T. Kitagawa, K. Tanaka & T. Kitagawa. 2017. Molecular and morphological analyses revealed a cryptic species of dojo loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Cypriniformes: Cobitidae) in Japan. *Journal of Fish Biology*, 91: 989–996. DOI: 10.1111/jfb.13393
- 清水孝昭・鈴木寿之・高木基裕・大迫尚晴, 2011. 沖縄島と西表島より得られたドジョウの形態的・遺伝的特徴. 日本生物地理学会会報, 66: 141–153.
- 上田吉幸・前田圭司・嶋田宏・鷹見達也, 2005. 漁業生物図鑑：新北のさかなたち（2刷）. 北海道新聞社.